

アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ ジョイス(4)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

37

(発行年 / Year)

2016-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013430>

アイルランドの文学的伝統と ジェイムズ・ジョイス（4）

結 城 英 雄

アイルランドの変貌

1959年以降の経済政策の転換は、アイルランドの文学的伝統に、なかんずくジェイムズ・ジョイスの受容に大きな影響をもたらした。1962年のジョイス・タワー開館に際しては、『ユリシーズ』を出版したシルヴィア・ビーチがパリから訪れた。また1982年のジョイス生誕百年祭の折には、孫のスティーン・ジョイスの参加もあり、ジョイスがアイルランド人作家として承認された。そして1994年にはジェイムズ・ジョイス・センターが開設され、ジョイス一家の写真、1900年前後の新聞記事、あるいはジョイスに関連する遺跡などについての情報が展示された。そうしたジョイスを包み込む流れに即して、『ユリシーズ』で描かれた一日である6月16日が「ブルームズデイ」と称され、その日の前後のダブリンは恒例の祝祭の空間になっている。アイルランドのジョイス受容も、ごく自然なものと思われた。1988年以降、ダブリン・ジョイス・サマー・スクールも開始され、ダブリンの立地を組み入れたジョイス産業が流布した。

イギリスの作家アンジェラ・カーターも、アイルランドの1982年のジョイス受容を喜び、こう述べていた。「ダブリンの人々はお互いにハッピー・ブルームズデイを唱えた。この日は国民的祝日とすべきであると言う人もいた。ダブリンの街全体が祝祭の空間になっていた」(Carter 207)。事実、国営テレビのRTEは『ユリシーズ』の朗読を放送した。これは内的独白を際立たせたのみならず、音楽などの背景も取り込む見事な放送であった。その一方、1967年にはジョーゼフ・ストリック監督の映画『ユリシーズ』も制作されていたが、その放映が許されるのははるか先の今世紀のことである。リアリズムの傾向が強いことが拒否の理由である。アイルランドの文化的後進性を示す出来事である。ちなみに、ストリックの1977年の『若い芸術家の肖像』の映画も、芸術的芳香のある実に見事な作品であった。また1987年には短篇集『ダブリンの市民』の「死者たち」が上映されてもいる。

こうした状況と関わるのがアイルランドの文化闘争である。そのうちでも際立っているものとして、アイルランド人の学者による1992年のジョイス作品集がある。細かい解説と注釈が加えられ、安価なペンギン版として刊行された。ジョイスの作品がダブリンを舞台としていることからして、その歴史的データが詳細に説明されており、裨益するところが大である。残念なのは、それ以前に刊行された注釈書と比べ、それを超越するレベルには至らなかったことである。が、嘗てそのものは評価できる。このシリーズでもう一つ問題なのは、北アイルランドを標的にして、カトリックを中心とした政治的な姿勢が

前景化されていることだ。カトリック教会がジョイスを批難の対象としていたことを考えれば、やはりアイルランド共和国の矛盾を露呈しているようにも思われる。前年に刊行されたアイルランド文学の選集、『フィールド・デイ・アンソロジー』のジョイス版である。

にもかかわらず、1998年に南北和平への道が開かれた。アイルランド島全土をアイルランドとする、デ・ヴァレラの1937年の発言をめぐる国民投票が行われ、圧倒的な支持を得て、北の独立が承認されたのだ。そして2007年には南北アイルランドの和平協定も締結され、アイルランド共和国は北を分離することを承認し、相互の融和が図られた。『ユリシーズ』第12挿話における「市民」とブルームの対立に、解決が与えられたとする新聞報道もあった。こうして内向的なアイルランドの政治事情を超えたジョイス研究が進行し始めた。そして『ダブリン・ジェイムズ・ジョイス・ジャーナル』が翌2008年に登場することとなった。が、ジョイス受容の文化闘争が百花繚乱という様相を呈していたことも事実である。その問題点も順次整理しながら、ジョイス受容によってもたらされた、アイルランドの文学的伝統への影響を検討することにしたい。

開花期（1882年～2007年）

ジョイス受容の経緯

アイルランドにおけるジョイス受容には二律背反がある。ジョイスがモダニストのみならず国際的な作家であることから、ジョイス受容は、アイルランドが国際化したことを立証している。ショーン・リーマスの経済政策の転換を契機として、アイルランドはECに参加し、さらにEUの加盟国として国際的な相貌を呈することとなった。言い換えるなら、アイルランドがジョイス化したということである。その一方で、ジョイスの作品がダブリンを舞台とし、アイルランドの歴史と関わっていたことから、ジョイス受容にはアイルランド自らの歴史への固執という側面も色濃い。ジョイス受容には外交的であると同時に内向的な姿勢も見て取れよう。これは母語ゲール語への固執と同じく、アイルランド国家のアイデンティティ構築へのこだわりとも見受けられる。いずれにせよ、グローバル化という世界の趨勢に鑑みるなら、ジョイス受容は世界へ向けた独自の文化の発信とも捉えられる。

南北の和平協定へのプロセスにおいて、ジョイス受容をめぐる対立も静まった。ジョイスが南のカトリックの世界を代表する作家であるのなら、その作品は、イギリスへの対抗のアイコンとして機能していたであろう。逆に、北のプロテスタント側からすれば、ジョイスの反カトリックの姿勢は南を攻撃する格好の材料であった。ジョイス受容はこのように南北の文化闘争の淵源ともなっていたのである。ジョイス・ミュージアムも、ジェイムズ・ジョイス・センターもそうした闘争のアイコンであった。しかしながら、和平協定はそうした闘争の不毛性に終止符を打つことになった。こうしてジョイスという作家の名声によって立つローカルな論争を超え、国際性というレベルの問題と絡めたのびやかなモダニズム論が必要となった。

ここで詩人シェイマス・ヒーニーを取りあげておきたい。彼は北で生まれ、南北の闘争を目のあたり

にし、ヨーロッパ文明の視野を取り込み、文学の地平を広げていった。その彼が南に拠点を求めたときにはそれなりの波紋があったが、それは創作の都合によるところが大きい。北の出身でありながら南に移住したことを云々しても始まらない。彼の詩には南北の問題を素材したものが多いが、いずれも現代の狭い領域で謳ってはいない。ギリシア悲劇なども射程に入れ、地域的な問題を国際的なレベルで再考している。ジョイスのようにヨーロッパへ離脱することがなかったものの、ジョイスの意向を十全に理解しての創作である。ジョイスのヨーロッパ志向ということ言えば、フラン・オブライエンも、あるいはエリザベス・ボーエンの姿勢も変わりはない。いずれもモダニストとしてのジョイスの役割を継承しながら、時代に即する創作をしていたのである。ヒーニーの詩集『ステイション・アイランド』(1984)には、ジョイスの大らかな声が響いている。

そうしたジョイス受容と対照的なのが、アイルランド神話によって立つ、イギリス系アイルランド人 W.B. イェイツへの敵対であった。経済の好転と軌を一にして、妖精、靄のけむる湖、ラウンドタワーといったアイルランドの象徴を謡った詩と決別し、新たな時代を語るには、ジョイスの方が好都合であったのだ。ショーン・オフエイロンは1962年に、ローカル・カラーを謡うのではなく、「アイルランドの生活を客観的に探るべきである」と語った(Brown 81)。さらにトマス・キンセラも1966年に、ジョイスは「アイルランド語が死んで以来、アイルランドの現実のために語った最初のアイルランド人」であると讃えていた(Brown 83)。

かくしてジョイス受容の必然性が語られ始めた。リチャード・カーニーの『変遷』(1988)によるならば、イェイツが前近代的であるのに対して、ジョイスの眼ざしはモダンの方向に、さらにアイルランドの新たな構想へと向いていたことになる。彼はこう述べている。

モダニズムは復興主義の目的とイデオロギを否定する。それは伝統との急進的な断絶を肯定し、受け継がれてきたアイデンティティの概念を疑問に伏す、そんな文化的自己照射の実践を承認するものである。モダニズムの精神は連続よりも不連続を、統一よりも多様性を、調和よりも対立を、遺産よりも新しさを好む[……。]アイルランド文化におけるモダニズムへの傾向は、伝統の正当な遺産を脱神話化する決意によって決定されるのである。(Kearney 12-13)

カーニーがジョイスを援用して、アイルランド事情を論じようとしていることに間違いない。ヨーロッパ化したジョイスがEUからの経済的利益の象徴であるとする中で、アイルランドを語るに際してもジョイス論を援用できるだろう。文化を語るのに文学批評を使用するにはためらいがあるが、彼の文化論を全面的に否定する必要はない。しかしながら、多文化社会を称賛するのであれば、アイルランド内部の不協和も調停しなければならない。ジョイスとイェイツを対立させたまま、アイルランドの南北の和解、さらにはアイルランドとEUとの調停もありえないだろう。

そうしたリチャード・カーニーの陥穽を見抜いたのが、まさしくシェイマス・ディーンである。ジョイスがモダンで、イェイツがその対極にあるとしたら、ジョイスの評価がヨーロッパ一辺倒の口実にな

る。アイルランドの様々な要素を縫合する手法は、多様性を一元化することにもなりかねない。ディーンによれば、そのようなジョイスの役割は、「すべての対立要素を流行へと統合する近代社会の力学」(Deane 56)にすぎない。アイルランドとジョイスを一体化することは、国家のアイデンティティを希薄にし、ヨーロッパの総体へとアイルランドを統合することにも等しいだろう。ディーンの論調の背景に民族主義の残滓を読み取ることは容易であるが、ジョイスを語る言葉が「ヨーロッパ文化」や「モダン」という抽象概念に潤色されてきたことは明らかであるだろう。

逆に、アイルランドがモダンであり、その風土からジョイスの文学が誕生したというのが、デクラン・カイバードのジョイス論の要諦である。その『アイルランド創出』(1995)にも明らかなように、彼はこれまでのイェイツへの評価を修正しただけでなく、イェイツたちの復興運動が前近代的であるとの説も覆した。アイルランドのアイデンティティを構築する営為は、民族主義的であると同時に近代的な運動である。多様な文化の統合を模索することは、アイルランドという国家の意味を問い、そこに普遍性を読み取ることである。その営為はまさしく「アイルランドの創出」であるだろう。かくしてイェイツの運動はジョイスと軌を一にした、広範囲のものと定義される。それに加えて、ジョイスの文学はヨーロッパで誕生したのではなく、アイルランドにその下地があったと指摘している。この考えの発端はエドワード・サイドにある。カイバードはサイドの「イェイツと脱植民地化」(1990)に大きな感銘を覚えたい。

カイバードを継承し、その底に流れる民族主義的な思想を取りあげ、南北問題に苦吟するアイルランド事情を論じる批評家もいた。これらの批評家はジョイスを語るよりも、自らの思想をジョイスに投影し、ジョイス受容を正当化する嫌いがあった。その一人がイマー・ノーランで、『ユリシーズ』第12挿話における、「市民」とブルームの対立をめぐる、「市民」の立場で読み、ジョイスの民族主義思想が「市民」の側にあるとした。さらに、エンダ・ダフィイは『ユリシーズ』の文体が「IRAの爆弾」にも等しいと論じた。これらアイルランド側の急進的なジョイス論に驚きを感じざるを得ないが、いずれもアイルランド側に立つ近年のジョイス研究者の読みに影響を与えている。そのような向きの研究者に何か述べるとしたら、少し距離を保ち、国外の書評を読んで欲しいという希望的観測につきる。ノーランの主張はともかくとして、その論調の乱れを修正する必要があるだろう。

このようにアイルランドのジョイス受容は一律ではない。アイルランドの社会的・経済的変貌には曲折が多い。性や宗教や政治などに対する姿勢の変貌もあり、ジョイス受容はアイルランドに益するところが大きい。同時に、ジョイス受容はアイルランドが開かれた国であるという相貌を示す対外的な手段である。それに加え、ジョイスの作品は外国人旅行者を魅了する要因でもある。アイルランドのジョイス受容にはこうした矛盾によって立つ。かつてエズラ・パウンドは、ジョイスの文学がアイルランドとは無縁であると語ったにもかかわらず、今やジョイスの文学をめぐるほとんどの論考において、アイルランドの存在が前景化されている。

虚構と現実

ジョイス受容をめぐる議論において、その作品の舞台がダブリンの「模写」であるかのように論じられることが多い。その前提とされているのが現実のダブリンと虚構のダブリンとのオーバーラップである。そのためダブリンへのジョイス模索の旅は、ジョイスのテキストの背景を中心とし、『ダブリンの市民』から『フィネガンズ・ウェイク』に至るまで、数々の遺跡への訪問となっている。『ダブリンの市民』や『若い芸術家の肖像』をめぐるのはブルース・ビッドウェルとリンダ・ヘファーの『ジョイスの方法』、『ユリシーズ』についてはクライヴ・ハートとアイアン・ガンの『ジェームズ・ジョイスのダブリン』、さらに『フィネガンズ・ウェイク』のためにはルイス・O・ミンクの『ガゼットィア』が必携である。

たとえば、『ユリシーズ』を知るには、各挿話を順次訪ね、サンディコーヴのジョイス・タワーから開始し、サンディマウントの海岸、エクルズ通り、グラスネヴィン墓地、デイヴィー・バーン酒場、国立図書館、国立産婦人科病院などを一巡することになる。ダートやバスを利用するだけでも、ジョイスの生家や関連する場所へ行ける。細かい資料はジェームズ・ジョイス・センターにあるし、古い新聞などを読みたければ国立図書館が便利である。もちろんジョイスの作品の背景がすべて残されているわけではない。再開発のために娼婦街は取り壊された。ブルームが居住した家も今はない。その一方で、ジェームズ・ジョイス・タワーは一年中無料で開館されることになったし、スウィニー薬局は今や『フィネガンズ・ウェイク』の読書会の会場となっている。それに加え、ブルームがかつて国立博物館で目にしたという、横臥するブッダの涅槃像も発掘されている。ジョイス研究者のために、ダブリンそのものが訪問者を歓迎しているように見える。

ところで、今日のダブリンはジョイスのダブリンと格段の隔りがある。簡単に時代を振り返ってみたい。何よりも当時のダブリンが人口30万人ほどの、イギリス支配下の植民地都市であったことを想起しておきたい。支配は七百年にもおよび、政治的にも、経済的にも、文化的にも弾圧されてきた。市内にはそうした支配にまつわるダブリン城や四法院といった威圧的な建物とともに、ネルソン提督やヴィクトリア女王などの像が立ち並び、「グレート・ブリトン」といったイギリスにちなんだ名前の通りがあふれ、イギリス国王の支配を示す「王立」という言葉を冠した機関もいたるところにあった。そしてイギリス軍の兵舎が市を取り巻くかのように点在し、市内を見回る警察官の姿も目立っていた。

同時にカトリック教会による精神支配もあった。教会は説教壇から市民たちに天国への道を語り、人生の指針を説いただけではなかった。告解という制度によって、個人の秘匿する隠微な領域に対しても支配権を行使していたのである。告解は精神分析にも等しく、精神分析が患者の神経を鎮めるように、信者から地獄の恐怖を取り除くことを目的としていた。が、実情は信者の心の内を監視するものであった。告解は監獄における「一望監視」と変わらない。

さらに民族主義の運動も高まり、アイルランド人のアイデンティティをめぐる論争も起こっていた。たとえば、ダグラス・ハイドが一八八二年、講演「アイルランドにおける脱英国化の必要性」で反英感情を煽った。こうして土着のカトリックたちは自らを「ゲール」(Gael)と称し、イギリス人たちを侵

入者の意の「ゴール」(Gall)という言葉で侮蔑した。そして民族主義の運動と軌を一にして、アイルランド文芸復興運動も開花した。これは W.B. イェイツ、レイディ・グレゴリー、あるいはジョン・ミリントン・シングといった、イギリス系アイルランド人を中心とした運動であった。政治とは無縁でありながらも、アイルランド人のアイデンティティの確立という理念においては、民族主義の運動と異なるものではなかった。

若きジョイスの苛立ちは、こうした錯綜とした社会状況のなかで、自らの方位を測定できなかったことにある。孤高の姿勢を保ちながらも、都市ダブリンでの暮らしに閉塞感を抱いていたのだろう。イギリスの植民地支配に反発しつつも、偏狭な民族主義への嫌悪もあった。カトリック教会から離れ、現実を肯定する文学を志向しながら、宗教から自由であったわけではない。さらに狭隘なアイルランド文芸復興運動にも懐疑的であった。こうしてジョイスは、「恋人」ノーラを連れ、「英語教師」の職を求めてダブリンから大陸へ離脱する。1845年から49年にいたるジャガイモの大飢饉を転機として、アイルランドから夥しい数の人々が海外に移住した。以降、経済政策の転換が図られる1960年代にいたるまで、その人口は減少し続けた。ジョイスの離脱が特別であったわけではない。奇妙なのはそのような寂れた都市ダブリンに、ジョイスが徹底的に固執したことである。

アイルランドのジョイス受容はそうした自らの歴史と深く関わっている。その作品が都市ダブリンを基に構想されているとしたなら、当時の人々のジョイスへの反発は必然であったろう。民族主義やカトリック教会への否定的な眼ざしによって立ち、ダブリンの地誌を微細に取り込み、まごうことなく都市の暗部を映し出した。その点をめぐっては、ジョイスにもそれなりの言い分はあったはずである。細部への固執は自己について、そして自己を生成した都市について、さらにはあるべき姿の国家について、書くことであったかもしれない。

そのようなジョイスの作風がアイルランドで否定されたとしてももっともなことであった。同じアイルランド人である同胞にとって、ジョイスの作品が孕むダブリンの隠微な部分を認知するのは容易だろう。ジョイスの作品を首肯することなどできようはずもない。今日、ジョイスがアイルランド人作家として承認されているのは、時代の変貌があったからだ。民族主義運動が潰えたわけではないが、南北の分離は一般の民衆の関知するところではなくなった。そしてカトリック教会と政治との間の分離も1973年、EC加盟当時に実現している。今ではカトリック教会の問題点が断罪されることもある。そしてフェミニズム運動の高まりにより、墮胎がいまだ違法であるにせよ、避妊は可能となっている。しかしその通りであるとすれば、ジョイスが時代に抗して描いた問題も、今では特段の衝撃ではない。ジョイスをめぐってダブリンを旅するのであれば、その作品も百年前の地誌や思想のみならず、ダブリンの変貌と連結させて読まれるべきかもしれない。

なるほどジョイスは『ダブリンの市民』において、市民の麻痺的な生態を描いた。『若い芸術家の肖像』では、芸術家の魂の成長を綴り、創作のためにダブリンから離脱する必要性を描いた。逆に、『ユリシーズ』では、先行の作品の挑発的なテーマを超え、様々な手法を用いて、慈しむかのような大らかな眼ざしでダブリンの一日を複眼的に描いた。さらに『フィネガンズ・ウェイク』では滑稽な民話を下

敷きにして、ダブリンの一夜の夢の中に人類の歴史を書き込んだ。世界的な作家としての評価を受けながらも、ジョイスの作品は地域的な素材が基になっている。ジョイスはダブリンの地誌や文化や歴史を前提として、そこに自らの物語を貸し与えていったのだ。

しかしながら、ジョイスの作品は、ダブリンを「模写」しているのではなく、「改変」していることにも留意すべきだろう。ジョイスは都市ダブリンの全景を描いているわけではない。上流階級の人々の煌びやかさや苦悩に想いたることはなかったし、日々の糧もないその日暮らしの労働者階級の人々に目を向けることもなかった。ジョイスの描いたのは自らの階級である中流の下層、いわゆる市民と称される人々であったが、その階級の全容を描いたわけでもない。ジョイスの人物像に肉薄するためには、その人物の意識を形成している社会的・文化的・政治的な諸々の資料の解釈が不可欠であるが、それですべて済むわけではない。短篇集『ダブリンの市民』では麻痺というテーマが先行し、そのテーマに即した物語の歪曲もある。自伝的小説の『若い芸術家の肖像』においては、離脱の必要性を強調するあまり、民族の根本的な問題に取り組むこともない。その一方、神話を枠組みとした『ユリシーズ』や『フィネガンズ・ウェイク』では、ダブリンが稠密に描かれているものの、ダブリンという境界から越境しているところが大きい。

ジョイスの著作はダブリンとの関わりで論じられることが多いが、しかしジョイスの創作に及ぼした大陸の影響を見落としてはならない。『ユリシーズ』の末尾には「トリエステーチャーリーヒーパリ、1914年-1921年」と、創作に関わった都市と歳月が記されている。なるほど1904年6月16日のダブリンを舞台にしているとはいえ、その背景には大陸の都市の影響があったであろう。先行の『若い芸術家の肖像』には「ダブリンートリエステ、1904年-1914年」、後続の『フィネガンズ・ウェイク』には「パリ、1923年-1939年」と記されている。これら作品末尾の銘記を読むかぎりでも、ジョイスの作品がアイルランド側にのみ固執していなかったことが明らかだ。

事実、作品のいたるところにモダンな要素がある。これはいずれアイルランドのジョイス受容においても指摘される要因であるが、ジョイスの意識がモダンであったとするなら、それは大陸との関わりで論じられるべき問題だろう。当時のダブリンは色褪せた都市であったのだ。この相違をめぐり、フランコ・モレッティは、「ジョイスがアイルランド人作家なら、『ユリシーズ』のダブリンが二十世紀初頭の本物のダブリンでしかないのなら、ジョイスや『ユリシーズ』について語るべきことはない」(Morretti 189-90)といった趣旨のことを述べている。アイルランドがモダニズムを指導したと語るとき、イマー・ノーランやエンダ・ダフィの意識には、ダダイズム、表現主義、狂気と理性、無意識といった大陸の思想への配慮があるとはとても思えない。両者ともアイルランドのモダニズムを語りながら、その具体的な問題への分析は曖昧である。

そもそも、『ユリシーズ』で語られている「悪夢としての歴史」も、第一次世界大戦やダブリンの復活祭蜂起と無縁ではない。ジョイスが国際的な作家として評価されるとしたら、ジョイス自らが国際的な視野で創作していたからだ。ノスタルジーを込めて、1904年6月1日を描いたわけではない。そこにはダブリンに対する多様な視点が埋め込まれ、読者の硬直した意識を修正してくれる仕組みがある。ア

アイルランドにおけるジョイス受容は時代の都合で語られているところが多いが、ジョイスの創作の文脈への配慮も必要であろう。そうした文脈の一つとしてひとまず、1916年の復活祭蜂起に論を向けておきたい。

復活祭蜂起百年祭の波紋

事実、アイルランドのジョイス受容をめぐることは、復活祭蜂起も無視しえぬ素材である。これはジョイスの個人的な問題とも関わりがある。復活祭蜂起の折、暴徒を鎮めようとした友人フランシス・シーヒー＝スケヒントンが蜂起の一味と勘違いされ、裁判なしで処刑されたのだ。またアイルランドの名誉のために第一次大戦に参戦して亡くなった友人トマス・ケトルもおり、彼の死も悲痛な出来事として記憶されたと思われる。『ユリシーズ』第7挿話の冒頭部の記述は、スケフィンントンの事件と無縁ではない。『ユリシーズ』が1904年6月16日のダブリンを舞台としているにせよ、執筆開始は1914年で、その刊行は1922年のことである。執筆中の出来事が作品に盛り込まれたとしても不思議ではない。したがって、第7挿話の冒頭部でのスケフィンントン夫人の描写には、ジョイスの屈折した想いが投影されていよう。アイルランド共和国の成立は『ユリシーズ』が刊行された1922年のことであり、独立の契機は1916年の復活祭蜂起であった。アイルランドにおけるジョイス受容の背景には、復活祭蜂起との接点もあると思われる。

復活祭蜂起は1916年4月24日月曜日に起こり、4月30日には終結している。ドイツからの兵器の運搬に関わったロジャー・ケイスメントは捕われ、日程の混乱も加わり、イギリス軍はまたたく間にこの騒乱を鎮圧した。これまでのアイルランドの数々の蜂起と同様、無謀なものにすぎなかったのである。それが国家独立への道を開いたのは、首謀者たちに対するイギリスの裁判なしの処刑にあった。第一次大戦中のこと、イギリス人たちは無謀な事件と軽蔑した。イギリス軍のために第一次大戦に参戦していたアイルランド人も多かった。そのような状況から、アイルランド人の間にも蜂起に対する敵意が渦巻いていた。それでもこの事件は神話化されるにいたった。それは裁判なしの処刑に民衆の同情が寄せられたからである。

この事件の際にフランスにいたイエイツは、この出来事を「1916年復活祭」という詩に刻み込んだ。イギリスは第一次大戦が終結したならば、アイルランドの独立を認めることを約束していた。もちろん北を分離してのことであったが、その約束の実現の前の蜂起はイエイツにとっても驚嘆すべき事件であったのだろう。そのため「恐ろしい美が誕生した」という言葉が繰り返される。変哲のない日常を送っていた人々が、川の流れを妨げる石でもあるかのように、頑強な心に憑かれ、歴史の歯車に抵抗したのだ。その人々のうちには、パトリック・ピアス、トマス・クラーク、ジェームズ・コノリー、トマス・マクドナなどに交じって、イエイツと親しかったコンスタンツ・マーキアヴィッチといった高貴な女性、あるいはイエイツが愛していた女性の夫ジョン・マックブライドも含まれていた。

イエイツがこの蜂起を称賛したわけではない。日常を錯乱する蜂起を讃えることもなく、ただ驚いていたにすぎない。ジョイスも同じくこの事件に関心があったことは、『ユリシーズ』のいくつかの箇所

にも明らかである。第12挿話では1803年の蜂起の首謀者ロバート・エメットの公開処刑が描かれているが、その執行者はジョン・マクスウェル少将である。彼は復活祭蜂起の反逆者の処刑を統括した人物として知られている。またジョイスの作品には秘密結社フィニア会への言及もある。『若い芸術家の肖像』ではクリスマスの場面でジョン・ケイシーへの親しみを描き、1907年の評論「フィニアニズム——最後のフィニアン」と題してジョン・オリアリーについて語り、『ユリシーズ』第2挿話ではパリに亡命したケヴィン・イーガン（ジョーセフ・ケイシー）との交流を語っている。

実のところ、ジョイスはパトリック・ピアスとも交流があった。ピアスは1879年生まれでジョイスよりも3歳年長である。1900年には王立大学で近代語の学士の資格を与えられ、同年にはキングズ・インで法廷弁護士の修行を開始している。きわめて優れた人物で、自民族のゲール語にも関心を示していた。それでもジョイスの姿勢は曖昧である。1916年にはアイルランドと一線を画する『若い芸術家の肖像』を出版しただけでなく、エズラ・パウンドの力添えでイギリスの王立基金も受けている。このジョイスの姿勢に近いのが劇作家のショーン・オケイシーである。彼は復活祭蜂起を脱神話化した劇を書いて、アイルランドから亡命せざるをえなかった。

2016年は復活祭蜂起の百年祭に相当し、様々な祝典が催され、アイルランド共和国の成立に不可欠な蜂起として祝祭されている。市民たちも蜂起の意味を考えることもなく、その神話を受け入れている。街の中心部で軍隊と警察のパレードが行われ、国家成立の物語が定着したようである。かくして経済的な安定が続く限り、ジョイス受容も問題にされることもない。ジョイスが亡くなって以降、宗教や民族主義やゲール語問題に疑義を抱く、多くの「スティーヴン・ディーダラス」が輩出したが、今やその存在は薄れている。蜂起の拠点となったGPOでは、「アイルランドの所有とアイルランドの運命の無拘束の支配のため、アイルランド人民の権利を宣言する」と語られた。復活祭50周年の1966年、IRAがGPOの前に立つネルソン塔を爆破し、蜂起で亡くなった人々への哀悼の意を表した。そして復活祭蜂起の宣言は今日の経済発展と不可分に進行している。

その一方、イエイツたち文学者の役割を再認識する必要もある。彼の「1913年9月」でのジョン・オリアリーとロマン主義の死やそれを取り巻く麻痺的な市民たちの生態、さらに「1916年復活祭」に込められた復活祭への不可解な認識など、ジョイスのものでもあった。『ダブリンの市民』にあふれる、同胞に対する自己批判にはイエイツに通じるところがある。アイルランドの独立は国民の悲願であったかもしれないが、蜂起そのものは国民の理念から遊離した暴挙にすぎなかった。市民たちの日常を豊かにしたわけではない。これはその後の歴史にも明らかである。これら二人の事情を少したどりながら、復活祭の今日的意義をなぞることにしたい。

その手始めはジョン・ヒューストン監督の「死者たち」の脚色である。物語は1904年のクリスマス・パーティーでの出来事である。ジョイスの作品を忠実に描いたとされながらも、1987年の視点で1904年を扱っており、神のような位置での変更がいくつかある。その一つはミス・アイヴァーズをめぐる描写、もう一つはグレイスという人物の登用である。いずれも1980年代のアイルランドに至るための歴史的な指標である。前者が政治に関わるとしたら、後者は文化を問題にしている。ヒューストンは自らの時

代を肯定するために、変更をしたと思われる。あるいは、1904年には現在にいたる可能態が存在していたと伝えなかったのだろう。

ミス・アイヴァーズは、アイルランド語の問題をめぐり、民族主義者の視点から大陸志向のゲイブリエルと険悪になる。彼女はアイルランド人のアイデンティティ構築のために母語であるゲール語を学ぶ必要性を唱えるが、ゲイブリエルはフランス語やドイツ語の学習を優先している。こうして二人の間に亀裂が入り、ミス・アイヴァーズは夕食を共にすることもなく、早々と別れを告げパーティ会場から逃げ帰る。このとき、ジョイスのテキストでは「さようなら」というゲール語を発するにすぎないが、ヒューストンは「ジェームズ・コノリー」の集会に出席するためだとしている。ジェームズ・コノリーは復活祭蜂起の首謀者の一人で、負傷しただけでなく、やはり裁判なしで処刑された人物である。今では英雄として神話化されており、ミス・アイヴァーズも賛美していたのだろう。

ジョイスは『ダブリンの市民』所収の「蕪の日の委員会室」においても、労働者階級の代表者としてジェームズ・コノリーらしき人物に言及しながら、彼の理想を物語に取り込むことはない。ジョイスの意図は国民党の公認候補でありながら、腐敗した候補者や運動員たちの麻痺を暴くことにあったのだろう。その意味で、ジョイスはコノリーの理想を取り込むことなく、麻痺を描こうとしたと思われる。ミス・アイヴァーズの描写から推すかぎり、ジョイスがコノリーや復活祭蜂起に賛同しているとも思われない。ヒューストンの映像はその対極にある。

同じくグレイスの扱いもジョイスと対極にある。この人物はジョイスの作品にはない、レイディ・グレゴリー翻訳の「若いドナル」という神秘的な詩を紹介する。そしてパーティの一同はその神秘に感動する。この詩はゲール語からの翻訳で、昔日のアイルランドの人々の心を映し出す。同時にレイディ・グレゴリーという名前から、アイルランド文芸復興運動の動向を示唆するつもりもあったであろう。この運動は政治の空白を埋め、文学によってアイルランド人のアイデンティティを確立することであった。ジョイスはこの運動に敵意を抱いていると言われるが、こと「死者たち」の結末は曖昧である。ジョイスが否定的な意見を反復していたにせよ、文芸復興運動から影響を受けていたことに違いない。

このような事情からすると、ヒューストンは復活祭蜂起、アイルランドの独立、さらに1980年代のアイルランドというように、直線的な因果関係を読み取っているように見受けられる。ヒューストンの翻案は彼にとってのジョイスであり、本来のジョイスとは無縁であろう。復活祭蜂起への視座は、文芸復興家たちのみならず、ジョイスについても曖昧である。1990年代の事情も念頭におきながら、ジョイス受容の意味をさらに検討したい。

科学研究課題番号：237033

引用・参考文献

Bidwell, Bruce and Linda Heffer. *The Joycean Way: a Topographical Guide to "Dubliners" and "A Portrait of the Artist as a Young Man."* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1986.

- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History 1922-2002*. London: Fontana, 2004.
- Carter, Angela. *Expletives Deleted*. London: Vintage, 1992.
- Deane, Seamus. "Heroic Styles: The Tradition of an Idea." In *Ireland's Field Day* ed. Field Day Theatre Company, London: Hutchinson, 1985.
- Fogarty, Anne and Fran O'Rourke, ed. *Voices on Joyce*. Dublin: UCD P, 2015.
- Foster, R. F. *Modern Ireland 1600-1992*. London: Allen Lane, 1988.
- Gibbons, Luke. *Joyce's Ghosts: Ireland, Modernism, and Memory*. Chicago: U of Chicago P, 2015.
- Harte, Clive and Ian Gun. *James Joyce's Dublin: a Topographical Guide to the Dublin of Ulysses*. London: Thomas Hudson, 2004.
- Kearney, Richard. *Transitions: Narratives in Modern Irish Culture*. Manchester: Manchester UP, 1988.
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. London: Vintage, 1995.
- _____ Review of Enda Duffy, *The Subaltan "Ulysses"*, *James Joyce Quarterly* vol. 34, no. 3 (1997) : 400-405.
- Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Indiana: Indiana UP, 1978.
- Morrei, Franco. *Sighns Taken for Wonders: On the Sociology of Literary Forms*. London: Verso, 2005.
- Nolan, Emer. *James Joyce and Nationalism*. London: Routledge, 1995.
- Tóibin, Colum. "After I am Hanged my Portrait will be interesting." *London Review of Books*, 31 March (2016) : 11-23.